

資料室だより 125

ペニャローサ Peñalosa とアネリオ Anelio という 16 世紀の 2 人の作曲家と楽譜について紹介します。資料室ではイギリスの *Mapa mundi* からすぐれた宗教合唱曲のエディションを購入しております。音楽学者のブルーノ・ターナー氏が主宰するこのイギリスの出版プロジェクトは、ルネサンス時代の合唱曲を良質のエディションで安価に届けようという意図で運営されています。このような品質もよく良心的な出版社をつぶさないためにも是非、楽譜はコピーではなく購入しましょう。

+ フランシスコ・デ・ペニャローサ (c1470-1528)

セビリアで活躍したスペインの初期ルネサンスの作曲家。皆さんにはあまりなじみがないかもしれませんが。作品自体失われてしまったものも多く、またマニュスクリプトの形でしか残っていないのが大部分で全集楽譜もありません。しかしスペイン・ルネサンスに強いターナー氏が彼のモテットをトランスクリプションしております。当館には「*Sancta Mater, istud agas*」、「*5 Spanish liturgical hymns*」、「*Missa el ojo*」、「*Missa adieu mes amours*」、「*Missa L'homme arme*」、「*Motets for three voices*」、「*Motets for 4 & 5 voices*」の 7 冊を所蔵しております。様式的にはフランドル楽派ですが、注意深く分析するとスペインの固有性を見出すことができます。

+ フェリーチェ・アネリオ (1560-1614)

パレストリーナの後継者としてローマで活躍した典型的なローマ楽派の作曲家、司祭でもあります。1612 年には *Roman Gradual* の改訂をソリアーノと共に任されるという典礼音楽史上重要な役割を果たします。作風は一見保守的にみえますがパレストリーナをただ模倣しただけではなく、彼個人の表現的要素がその作品を彩っています。特に今回購入した聖週間のためのレスポンソリウム *Responsories for Matins(Tenebrae) on Maundy Thursday / Good Friday/ Holy Saturday* は深い宗教的な情熱が感じられます。教皇庁の作曲家となったことにより典礼音楽作品を中心に活動しますが、イタリア語による霊的マドリガーレ、霊的カンツォネッタ、ラウダなど俗語による宗教作品が豊富なことも彼の特徴です。

ローマ楽派というのは、宗教改革に対するカトリック側の内部刷新の動きの一つとして開催されたトリエント公会議 (1543-63 年) の決議を受けた教会音楽の楽派です。聖なる言葉が明瞭に聞き取れるように無伴奏の声楽、つまり「ア・カペッラ様式」であること、また人為的な技巧を凝らすことを避けて教会音楽の人工的な純化を目指した 16 世紀後半の様式です。教会音楽の一つの理想として対位法の規範ともなり、時代を超越する普遍様式として生き続けていると言えます。

(杉本ゆり 記)